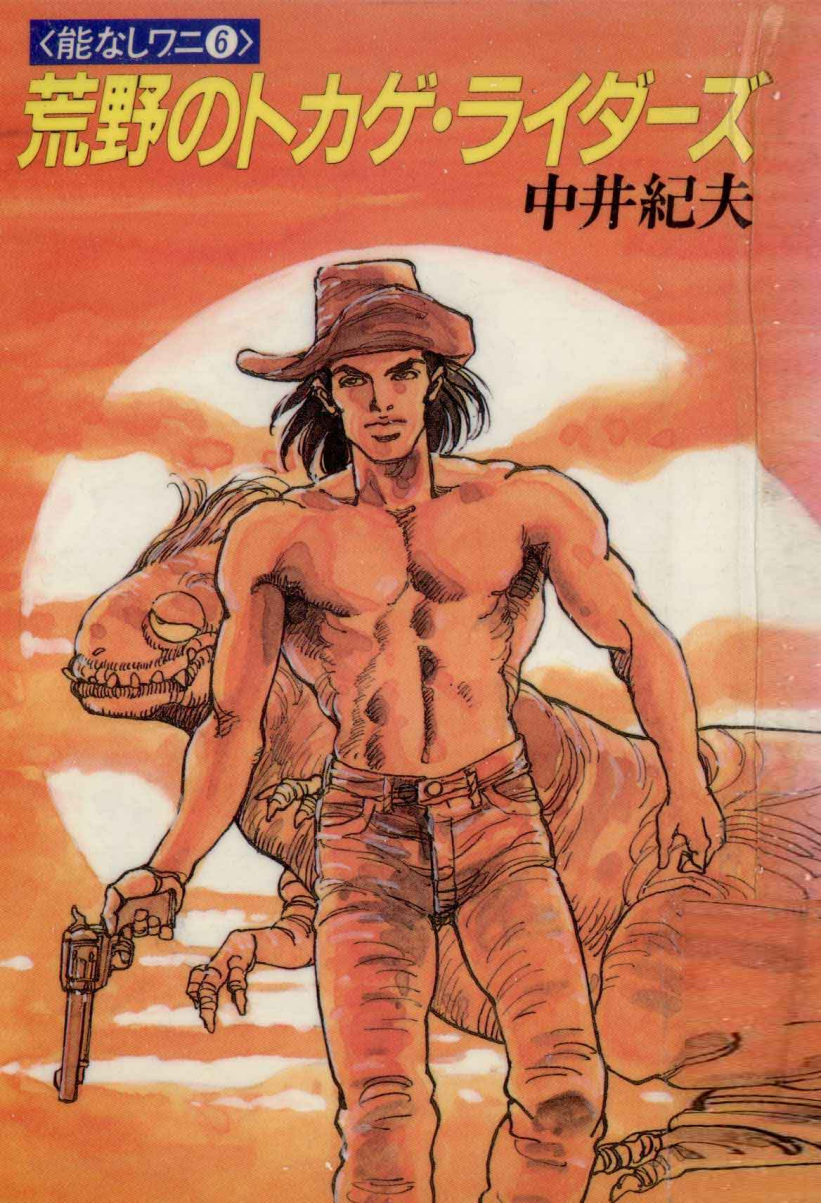
〈能なしワニ⑥〉

荒野のトカゲ・ライダーズ

中井紀夫



著者略歴 [illegible] 年生まれ 武蔵大学人文学部卒，作家 主著書「南から来た拳銃使い」「裏切り砦の拳銃無頼」「恋の拳銃無宿」「ワニよ銃をとれ」「続・ワニよ銃をとれ」「山の上の交響楽」（以上早川書房刊）

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

能なしワニ⑥
荒野のトカゲ・ライダーズ

〈JA293〉

一九八九年四月十日 印刷
一九八九年四月十五日 発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者 中井紀夫
発行者 早川清
印刷者 矢部富三
発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号 一〇一
電話東京(二五二)三一一一(大代表)
振替口座番号 東京六-四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社川島製本所

ISBN4-15-030293-6 C0193

ハヤカワ文庫JA
〈JA 293〉

能なしワニ⑥

荒野のトカゲ・ライダーズ

中井紀夫

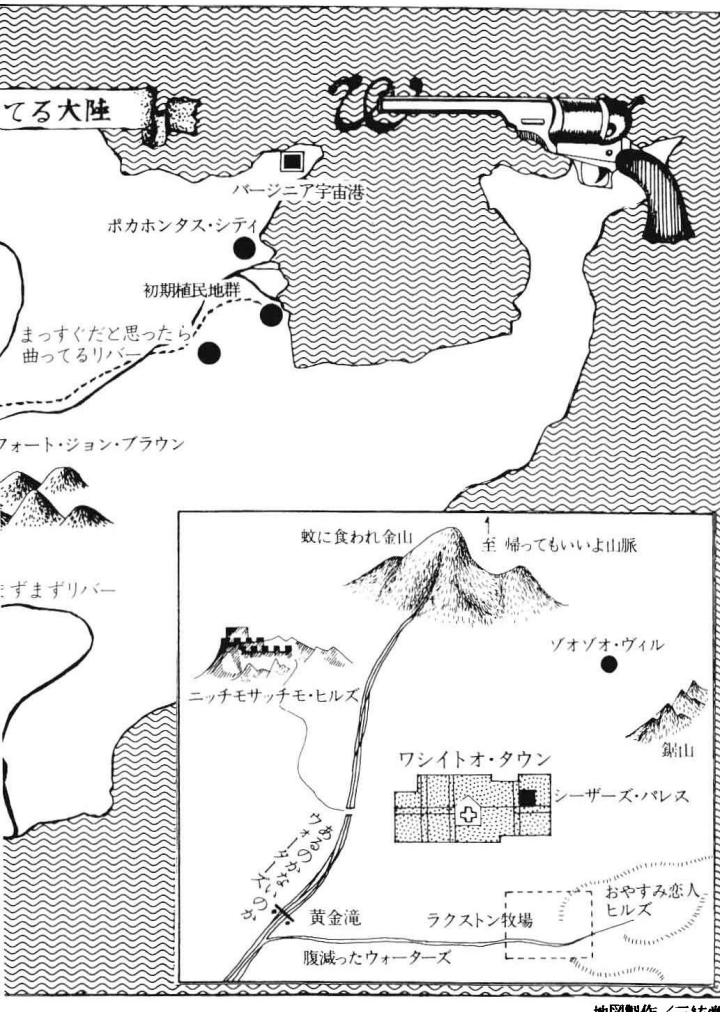
早川書房

2592

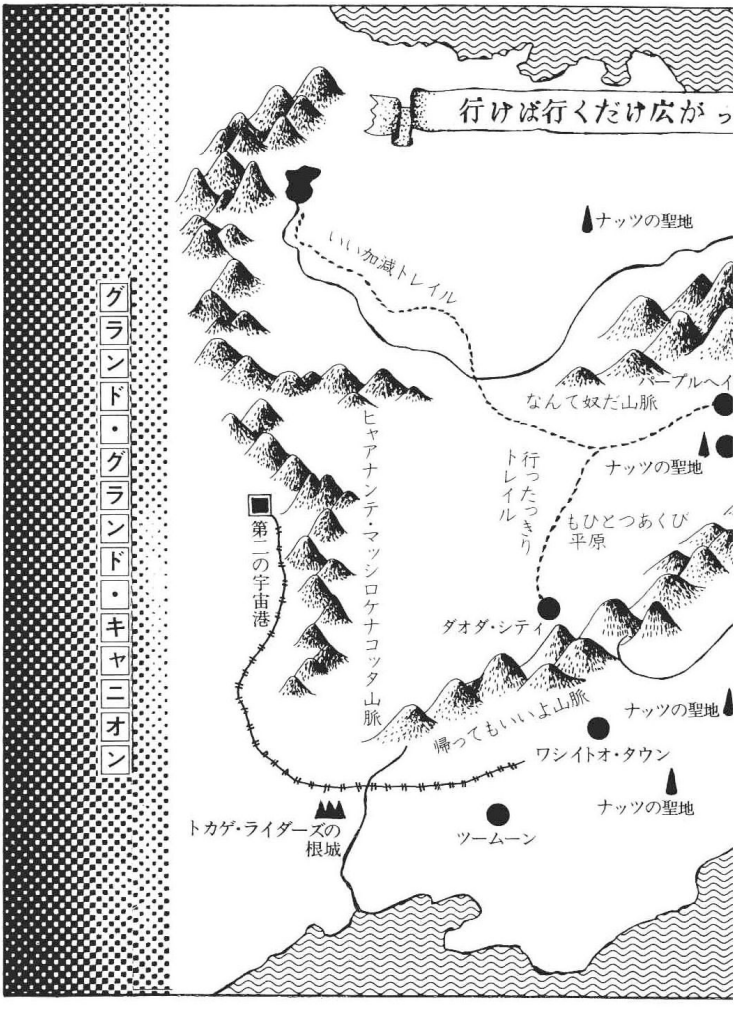
目次

第一章　谷底の闇　9
第二章　荒野の蒸気機関車　109
第三章　トカゲ・ライダーズ　227
あとがき　391

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb


てる大陸
バージニア宇宙港
ポカホンタス・シティ
初期植民地群
まっすぐだと思ったら
曲ってるリバー
フォート・ジョン・ブラウン
たずまずリバー
蚊に食われ金山
至 帰ってもいいよ山脈
ゾオゾオ・ヴィル
ニッチモサッチモ・ヒルズ
鉛山
ワシイトオ・タウン
シーザーズ・パレス
黄金滝
ラクストン牧場
おやすみ恋人
ヒルズ
腹減ったウォーターズ

地図製作／三紘堂


グランド・グランド・キャニオン
行けば行くだけ広がっ
ナッツの聖地
いい加減トレイル
パープルヘイ
なんて奴だ山脈
ナッツの聖地
行ったっきりトレイル
もひとつあくび平原
ヒャアナンテ・マッシロケナコッタ山脈
第二の宇宙港
ダオダ・シティ
ナッツの聖地
帰ってもいいよ山脈
ワシイトオ・タウン
ナッツの聖地
トカゲ・ライダーズの根城
ツームーン

荒野のトカゲ・ライダーズ

登場人物

ワニ……能なしの拳銃使い
クサフリ……ワニと組んで放火能力を発揮する男
マリエ……ワニたちの能力を増大させる力をもつ酒場女
尻尾怖い……ショホニ族の酋長
ママンティ……オロホワ族の呪術師
ホネトマト……バイヤト族の酋長
カウマネク……バイヤト族の韋駄天男
ピート……牧場主。保安官
ローラ……女教師。ピートの恋人
モンタナ……なんでも屋
ムーンシャイン……カルロスの元子分
トゥータフトゥーダイ……巨漢の賭博師
ミカ……少女アンドロイド
キャロウェイ……トカゲ・ライダーズのボス

第一章　谷底の闇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

1

垂直に高く切り立つ断崖のうえに、石造りの城館が建っていた。

大きな岩山の西の果てを区切る断崖である。

城館は断崖の縁ぎりぎりに聳えていた。ひとつまちがえばバランスを失して、谷底へ墜落してしまいかねない危うさであった。その異常とも見える位置の取り方に、館の主の奇妙な情熱をうかがい知ることができる。

城館の東側の平坦地を長い防柵で囲って、一種の砦が構成されていた。防柵の内側には人の住居や倉庫やトカゲ小屋が点々と建てられている。防柵の門や門のわきに設けられた見張台、防柵内のいくつもの建物が、いま、赤い炎を上げて燃えていた。

防柵内の建物の配置もまた、砦の主の奇怪な観念を反映していた。平坦地の北側の上り斜面の中程や南側の下り斜面の途中に引っ掛かるように、あるいは防柵内の人の通り道にあたる部分をわざわざ遮るように、人の住む建物が建てられていたのである。それらはひとえに、この

砦の主の気分の産物であった。主がある配置を快いと感じれば、住人は否応なく建物ごと引っ越しをさせられた。それは何か特別の図形を建物の配置によって描きだそうとでもしているようだった。

しかしその奇妙な努力も、いま灰燼に帰そうとしていた。砦を覆っているのは、ひとつの戦いの終わりを示す炎であった。強大な念動力によって無敵を誇ったこの砦の主が敗れたのである。砦の住人である髭面の荒くれたちが何人も、火を鎮めるべく防火用の砂を運び、類焼を防ぐべく建物を引き倒しているが、もはや火の手は人間の力の及ばない勢いになっていた。

その火に包まれた砦の西の端に、石造りの城館はなお、ずっしりとした姿で聳えたっていた。重畳と石材を積み重ねた城館の壁は、炎を映して赤く染まっていた。

城館のてっぺんに、ひときわ高く突き出ている望楼があった。望楼の断崖側に、石造りの手摺を丸く張り出したバルコニーがついていた。

その石造りの手摺を踊るように飛び越えて、ひとりの男が谷底に向かって身を投げた。

砦の主カルロス・ラブレスであった。

うおーっという、獅子の雄叫びのような男の声が、断崖の西に広がる平原の岩々のうえを渡っていった。西の空には、鋭い針で突かれて皮膚からあふれだした血玉のような夕日が、ぶよぶよと震えながら沈もうとしていた。男の声はその沈みゆく夕日を呼びもどそうとでもしているかのようであった。

男のからだは炎に包まれていた。

尋常な炎ではなかった。衣服や皮膚だけが燃えているのではないのだ。骨太で柄の大きな肉体のすべての部分から炎が噴き出していた。肉や内臓、そして骨までもが激しく燃えているのである。

炎の尾を引きながら男は墜落した。重力の法則にしたがって一秒ごとに加速しながら。そのまま谷底に激突して息絶えることはまちがいなかった。いや、そのまえに、からだを包む灼熱の炎が男の命を焼き尽くしているはずだった。

男が片目に掛けていた黒い眼帯の紐が焼き切れ、男の顔から離れて宙に舞った。それは赤い小さな炎を上げながら、蝶のようにふわふわと風に漂った。それを空中に残して、男のからだはいよいよ加速しながら墜落していった。

が――

男のからだは谷底の地面に激突することはなかった。

地面に近づくにつれ、男のからだは減速しはじめたのである。

まるでそこから先は空気の密度がにわかに濃密になり、抵抗が強くなって、容易には突っ込んでいけないといった具合だった。

谷底の赤茶色の地面から七、八十センチのところまで落ちて、男の落下速度はゼロになった。つまり宙に浮いたまま停止したのである。

大の字なりに仰向けに静止した男のからだは、なお炎を上げていた。

眼帯の取れたあとに、深く暗い眼窩(がんか)があった。眼球がなくなっているのである。そのぼくり

と窪んだ穴のなかで、染みだしてきた体液が沸騰してじゅくじゅくと泡立っていた。身に着けていた衣類は燃えてぼろぼろになり、肌は全身焼け焦げ、表皮が剝けたあとの肉から溶けた脂肪や体液が染み出し、滴り落ちていた。

健常な方の目の焼けただれた瞼を、男は一瞬見開いた。黄色く濁った白眼が剝き出しになった。その白眼がぐりっと動いて、瞼の裏側から黒眼が降りてきた。焦点は合っていない。死んだ目であった。その目で、断崖上の城館のあたりを睨んだ。そしてふたたび黒眼は瞼のなかへせりあがり、瞼が閉じられた。

瞼が閉じるのと同時に、男の周囲に、紫色の眩い閃光が多数閃いた。ばしゅっ、ばしゅっと、巨大な氷塊にひびの走るような音を発して、閃光はしだいに頻度を増していった。

やがて閃光はひとつの光の塊となって男のからだを覆った。輝く繭とも、縮小された星雲とも見えた。

光の繭は一瞬強く光ったのち、急激に輝度を落とした。

風に吹かれた蠟燭のように、光は弱々しく瞬いて消えた。

そのあとに、闇の塊が残った。

炎は見えなくなっていた。

黒い霧が凝縮したような闇であった。もしそのまえに立つ人があり、手をのべて霧のなかへ差し入れれば、霧のなかに入った手首が断ち切れたように見えなくなってしまう。そんな濃密な闇であった。

闇は泥のように緩慢に蠢き、わずかずつその領域を広げはじめた。

血玉のような夕日は、遙かな西の地平線に、すでに半分没していた。断崖の麓に、すぐ西隣にある台形をした岩の影が届いていた。影は時間とともに濃くなりつつあった。深い夜の気配を帯びた冷たい影であった。

その影の広がりとともに、男のからだを覆った闇の領域は、いよいよ濃く、いよいよ広く、乾いた大地に染み込む水のように広がっていった。

2

カルロス・ラブレスが墜落していくのを、ワニは石造りの手摺から身を乗り出して見届けた。城館の主の大柄なからだは紅蓮の炎に包まれて崖下へ吸い込まれていった。

崖は眩暈を誘う高さである。

じっさいワニは眩暈を感じた。その直前の激烈な戦いのために、身も心も消耗していて、ただでさえ足下がおぼつかないほどになっていたのだ。

カルロス・ラブレスの黒い眼帯が、炎の蝶と化して宙に舞うのを見たときには、ほとんど昏倒する寸前だった。このままでは眼下の深い谷底にみずからも身を躍らせてしまいそうだ。ワニは石造りの手摺にすがりつきながら、後ろ向きに向きなおった。城館の望楼にある、いまは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb